

2019年11月19日

立教大学国際学術研究交流制度  
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	小澤 実
受入学部・研究科・研 究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Associate Research Professor, Centre d'histoire et civilisation de Byzance, Collège de France 所属機関所在国：フランス
	氏名	Vivien Prigent
招へい期間		2019年10月15日～2019年10月31日（17日間）
研究経費		429,280円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。  
講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

\*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行  
った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
10月15日	来日
10月18日	公開シンポジウム「日仏ビザンツ学の史学史的アプローチ」@1103：15人 第2報告「聖母被昇天修道会の学問的研鑽とフランス・ビザンツ学の展開」
10月23日	公開シンポジウム「中世ユーラシアの印章、サイン、印章学」@D601：20人 第1報告「ビザンツ印章学への招待」
10月24日	公開講演会「辺境管区を統治する：ビザンツ期シチリアの場合」12号館第1会議室： 15人
10月31日	帰国

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

Vivien Prigent 博士は、10月18日のシンポジウム「日仏ビザンツ学の史学史的アプローチ」において、第1報告である小澤実（立教大学）「戦後日本のビザンツ研究と立教大学図書館所蔵ルメルル文庫」に引き続き、「聖母被昇天修道会の学問的研鑽とフランス・ビザンツ学の展開」を報告した。いずれも史学史的アプローチで日仏のビザンツ研究を検討するものであり、とりわけ、ポール・ルメルルの学統をひくプリジャン博士によるコメントは、第1報告に大きな進展をもたらした。10月23日の公開シンポジウム「中世ユーラシアの印章、サイン、印章学」では、博士は第1報告「ビザンツ印章学への招待」を担当し、その後、四日市市康博（立教大学）「モンゴル帝国の印璽」と佐藤雄基（立教大学）「中世日本の印章と花押」が引き続いた。10月24日の公開講演会「辺境管区を統治する：ビザンツ期シチリアの場合」では、23日の報告を受けて、初期中世のシチリア島における印章の出土状況とそこから導き出せる結論を提示した。

当該招聘において得られたものを記しておきたい。(1) 研究面においては、インテンシブなディスカッションにより史学史、印章学、ビザンツ学の最新成果を吸収し、なおかつディスカッションを通じてその進展に寄与することも可能となった。報告成果はいずれも後日文字化される予定である。(2) 教育面においては、いずれの講演会やシンポジウムも原則英語であるにも関わらず、教員や研究者のみならず、一般や学生も参加し最新の学問的議論に参加した。高度な議論に学生も果敢に挑戦する経験を得ることが可能となった。(3) 国際交流面においては、報告日以外にも、博士を博物館・古墳・旧跡などに連れてゆくことにより、博士が日本の歴史遺産を十分に吸収することが可能となった。博士の研究には徐々に日本の状況も組み込まれつつあり、今回の滞在の影響を見て取ることができる。

(特記事項) 本学との学術協定(学部間・研究所等間を含む)の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

博士は今後とも日本との研究協力に対して積極的である。研究所の設置など本学側の準備が整えば、直ちに協定などを進めたい。

<10月18日・10月23日の公開シンポジウムの様子>

